

The relationship of self-presentation on the Internet and self-esteem in the University student

小杉 大輔

文化政策学部 文化政策学科

KOSUGI Daisuke

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究では、Big Five尺度短縮版への回答をもとに、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の違い、および理想-現実、理想-ネット、ネット-現実のギャップと自尊感情との関係について検討した。その結果、まず、本研究の調査対象となった大学生において、情緒不安定性、非勤働性、非調和性の3側面についてはネット上で現実の自己よりも理想の自己に近い自己を表出する自己高揚的呈示をすること、外向性については、ネット上で自己卑下的呈示をすること、開放性においてはいずれの自己呈示も見られないことが示された。また、自尊感情については、全体として理想-現実のギャップが大きいほど低いことが示唆された。一方、ネット-現実のギャップについてもその大きさが自尊感情に影響を与える可能性が示唆された。

This article dealt with the relationship of self-presentation on the internet communication and self-esteem. One hundred and eighteen undergraduates completed the short form of Big Five Scale and the Self Esteem Scale. In the Big Five Scale, the students required to respond about real-self, ideal-self and the self on the internet communication. Results were as follows : The students seemed to make self-enhancing presentations about Neuroticism, Consciousness and Agreeableness on the internet communication. And discrepancies between ideal-self and real-self negatively correlate significantly with self-esteem. But students who made self-enhancing presentations on the internet communication showed higher self-esteem.

1. はじめに

人は誰もが、こうありたいと思う自己とあるがままの現実の自己にズレを感じることがある。そして、多様な社会的選択の可能性がある高校生から大学生にかけての青年期は、とくに理想の自己と現実の自己とのズレが大きくなる時期であるという(松岡 2006)。また、この理想の自己と現実の自己とのズレの大きさは、否定的な自己評価につながる。たとえば、先行研究では、理想の自己と現実の自己のズレと自尊感情との間には負の相関関係があることが指摘されてきた(遠藤 1992; 水間 1998; 松岡 2006)。自尊感情は、自分自身を基本的には価値あるものとする感覚であり、生きていくうえでの心理的な土台として不可欠なものである(梶田 1988)。

自己評価や自尊感情には他者からの評価が密接に関わっている(久保 1998)。他者からの賞賛は、自己評価を高めることにつながるし、他者からの非難は自己評価の低下を招く。久保(1998)は、この意味で、相手から高い評価を受け(低い評価を避け)、自己評価の維持、高揚をはかることは、自己呈示のもつ重要な機能のひとつであると考えられると指摘している。

自分についての情報を他者に伝えることに関して、心理学では「自己開示」「自己呈示」という二つの概念がある。自己開示とは、他者に対してありのままの自分をさらけ出すコミュニケーション行動である。一方、自己呈示とは、自分が好ましい性格や高い能力をもった人間だと相手に印象づけるために、自分の姿を誇張したり、歪めたりして伝達することを指す(深田 1998)。そして、自己呈示には理想とする自己像も影響を与える。たとえば、自分は暗い性格であると思っていなくても、明るく開放的な性格になりたいと思っていれば、他者に対していつも笑顔で接しようと

心がけるかもしれない。

沼崎(2001)によれば、このように理想の自己像に導かれた自己呈示は自己高揚動機にもとづくという。自己高揚動機とは、ここでは自己や自尊感情にとって肯定的な意味をもつように現象を解釈・説明し、そのような意味をもつ情報を収集しようとする動機である。“明るく開放的な性格”が自分にとって望ましいと考えていれば、そのようなイメージを他者に示すことで、他者から“明るい人である”という評価を引き出し、自分自身のことも“明るい性格である”と思うようになるというわけである(沼崎 2001)。このように、自己呈示には、その呈示した内容に合致するように自分自身をとらえるようになるという内在化の機能もある(長谷川 2010)。沼崎・工藤(2003)によれば、ある評価次元に関して自分ができることを積極的に主張してみせ、他者からその評価次元を含めた側面での高い評価を得ようとする自己呈示は自己高揚的呈示とよばれる。それに対し、ある評価次元に関して自分ができないことを主張してみせ、他者から“好意”のようなその評価次元以外で高い評価を得ようとする自己呈示は自己卑下的呈示とよばれる。

このように、自己に関する情報をコントロールしようと試みる自己呈示は、報酬の獲得と損失の回避に始まり、自尊感情の維持・高揚、望ましいアイデンティティの確立などを通じて適応を促進する効果をもつことが指摘されてきた(安藤 1994)。たとえば、ある側面について、現実の自己よりも理想に近い自己を表現することを繰り返すことにより、その側面についてよりポジティブな自己が内在化される。すると、理想の自己と現実の自己のズレが小さくなり、それが、自尊感情の維持・高揚につながる。自己呈示には、このような機能があると考えられるのである。青年期においても、日常的なコミュニケーションの中でこの

ような戦略的な自己呈示が行われると考えられる。実際、谷口・清水（2017）は、大学生を対象にした調査により、（有能さや親しみやすさについて）自らをよりポジティブに呈示する自己高揚的呈示と自尊感情の間に正の相関がみられることを示している。

ところで、現在の青年がコミュニケーション手段として、インターネット上のツールを利用することが多いというのは言うまでもない事実だが、コミュニケーションに関する研究では、インターネット上（以下ではネット上と表記する）では自己呈示をコントロールしやすくなるとの指摘がある（杉谷 2009；岡本 2013）。ネット上のコミュニケーションでは、非言語的な伝達手段が少ないこと、匿名的であることなどにより、自分の普段の姿を隠すことができる。また、非対面であり、時間を共有していないことにより、メッセージをゆっくり選択できるなど、自分の社会的スキルを補い、自己表現を意図的に統制できる。ネット上ではこのようにして、日ごろ他者とつきあう中で表現している現実の自己だけでなく、そうでありたいと思っ

ているが、普段の生活では表現できない自分、つまり理想の自己を表現しやすくと考えられるのである（岡本 2013）。一方、ネット上では、必ずしも理想を反映した自己が呈示されるわけではなく、現実の自己評価の内容を反映させたような自己が表出されることを示した研究がある（長谷川ら 2007、Back et al. 2010）。たとえば、Back et al. (2010) は、FacebookユーザーおよびStudiVZユーザーの青年（17～22歳）に 5 因子のパーソナリティ特性尺度への回答を求め、その結果をもとに、彼らのSNS上のプロフィールが現実の自己と理想の自己のどちらに近いのかを検証した。その結果、パーソナリティ特性の5因子すべてにおいて、調査対象のSNS上のプロフィールは理想の自己ではなく、現実の自己に近いものであることが示唆された。

小杉（2018）は、このような先行研究を踏まえ、大学生がネット上で現実の自己に近い自己を表出するのか、あるいは、より理想に近い自己を表出するのかについて検証した。この研究では、大学1年生に対し、Big Five尺度を用いて、現実の自己、理想の自己、ネット上でコミュニケーションするときの自己のパーソナリティ特性についての評価を求め、Big Fiveの5因子の特性—外向性、情緒不安定性、誠実性、開放性、調和性—が、これら3つの自己においてどのように変わるのかについて分析を行った。その結果、外向性、誠実性、調和性においては、理想の自己、ネット上の自己、現実の自己の順で得点が高く、情緒不安定性においては、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の順で得点が高かった。情緒不安定性は他の因子とは異なり、得点が高いほどネガティブな自己評価をしていることになるため、得点の傾向としては、外向性、誠実性、調和性と同様であったといえる。つまり、これらの4因子においては、ネット上の自己の得点は、理想の自己と現実の自己の間に位置するといえ、調査対象がネット上で、現実の自己とは異なる、より理想に近い自己を選択的に表出していることが示唆されたといえる。一方、開放性においては、現実の自己とネット上の自己の得点間に差がなく、理想の自己の得点がそれらより高かった。つまり、ネット上においては、理想の自己ではなく現実の自己を反映させた

ような自己が表出されることが示唆された。このように、小杉（2018）では、ネット上のコミュニケーションにおいて、外向性、情緒不安定性、誠実性、調和性については自己高揚的呈示が、開放性については自己卑下的呈示が見られる可能性が示されたのである。

筆者は、このようなネット上の自己呈示には、理想の自己と現実の自己のズレを調整し、自尊感情を高める機能があるのではないかと考える。しかし、小杉（2018）では、ネット上の自己呈示と自尊感情との関連については検証していない。そこで、本研究では、この先行研究と同様、Big Five尺度を用いて、大学生における現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の認識について調べ、さらに理想—現実、理想—ネット上、ネット上—現実のズレと自尊感情との関係について検証することにした。理想—現実、理想—ネット上、ネット上—現実のズレ（本研究では、以降はギャップと呼ぶ）の様相について分析することにより、ネット上の自己呈示と自尊感情との関係について、より直接的に検討できると考えた。

2. 方法

2.1. 調査対象

2017年度の静岡文化芸術大学「社会心理学」の授業内で調査への協力を呼びかけ、協力同意のあった学生のみを本研究の調査対象とした。質問紙の配布後、回答の仕方に関する教示を行った。質問紙は翌週の同講義時間中に回収した。回答を完遂していない者を分析から除外した結果、分析の対象となったのは118名（男性21名、女性97名）であった。平均年齢は19.42歳であった。

2.2. 質問紙

Big Five尺度短縮版

並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口（2012）によるBig Five尺度短縮版（29項目）を用いた。この尺度は、外向性、情緒不安定性、勤勉性（誠実性）、開放性、調和性の5因子からパーソナリティ特性を測定する尺度であるが、勤勉性と調和性については、ネガティブな内容の形容詞から構成されていることから、それぞれ非勤勉性、非調和性と呼ばれている。外向性と開放性は得点が高いほどポジティブであり、情緒不安定性、非勤勉性、非協調性は得点が高いほどネガティブであるといえる。外向性5項目、情緒不安定性5項目、非勤勉性7項目、開放性6項目、非調和性6項目の合計29項目の形容詞で構成されている。現実の自己、ネット上の自己、理想の自己のそれぞれについて、この29項目に対し、5件法での回答を求めた。すべての調査対象が、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の順で回答を行った。

まず、現実の自己については、冒頭に教示として、「以下のそれぞれの項目はあなた自身にどれくらいあてはまりますか。5：あてはまる 4：ややあてはまる 3：どちらでもない 2：ややあてはまらない 1：あてはまらない の中で、現在の自分の状態に最もあてはまると思うところの数字に○をつけてください。」と記述した。

ネット上の自己については、上の教示の1文目を「以下のそれぞれの項目は、ネット上のコミュニケーションをし

ているときのあなた自身にどれくらいあてはまりますか。」とした。また、質問紙を配布した際、インターネット上のコミュニケーションにはメール、Facebook、Twitter、LINE、ブログなどが含まれることを口頭で説明した。

理想の自己については、教示の1文目を「以下のそれぞれの項目は、あなたが理想とする自分にどれくらいあてはまりますか。」とした。

自尊感情尺度

本研究では、星野（1970）による日本語版のRosenberg Self-Esteem Scaleを用いた（10項目）。5件法（5：あてはまる～1：あてはまらない）による各項目の評定値の合計をもって自尊感情得点とした。調査対象全体の平均値は27.79、標準偏差は7.75であった。

3. 分析と結果

3.1. 各因子における3つの自己の違い

調査対象ごとに、5因子のそれぞれに含まれる項目群に対する得点の平均値を求め、それぞれ外向性得点、情緒不安定性得点、非勤働性得点、開放性得点、非調和性得点とした。これらの得点をネット上の自己、理想の自己についても算出した（表1）。そして5つの得点それぞれが、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己という3つの自己において異なるのかどうかを検討するために、1要因の分散分析をおこなった。

その結果、すべての得点において、主効果が有意となった（外向性得点：F（2、234）= 28.05、p < .001、情緒不安定性得点：F（2、234）= 141.05、p < .001、非勤働性得点：F（2、234）= 227.76、p < .001、非協調性得点：F（2、234）= 152.10、p < .001、開放性得点：F（2、234）= 287.27、p < .001）。

さらに、Bonferroniの方法で多重比較をおこなったところ、情緒不安定性、非勤働性、非調和性においては、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の順で得点が高く、これらの間の差は有意であった。開放性においては、理想の自己の得点が現実の自己およびネット上の自己の得点よりも有意に高く、現実の自己とネット上の自己の得点の間には差がなかった。また、外向性においては、現実の自己の得点と理想の自己の得点がネット上の自己の得点よりも有意に高く、現実の自己と理想の自己の得点の間には差がなかった。

表1 現実の自己、ネット上の自己、理想の自己についてのBig Five尺度による評定の平均値とSD

	外向性		情緒不安定性		非勤働性		開放性		非調和性	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
現実	3.55	.66	3.57	.79	3.55	.77	2.94	.68	2.69	.71
ネット上	3.19	.72	3.03	1.05	3.17	.81	2.84	.71	2.41	.72
理想	3.63	.45	2.04	.59	2.03	.59	4.25	.57	1.59	.55

3.2. 3つの自己間のギャップと自尊感情との関連

上で算出した外向性得点、情緒不安定性得点、非勤働性得点、開放性得点、非調和性得点の各得点について、3つの自己の得点どうしで引き算をおこない、さらにその値の絶対値を算出し、これを各自己間のギャップ得点とした。その結果、5因子それぞれにおいて、理想－現実ギャップ得点、理想－ネットギャップ得点、ネット－現実ギャップ得点が算出された（表2）。

表2 因子ごとの理想－現実、理想－ネット、ネット－現実のギャップ得点の平均値とSD

ギャップ	外向性		情緒不安定性		非勤働性		開放性		非調和性	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
理想－現実	.50	.39	1.53	.90	1.55	.83	1.32	.74	1.12	.70
理想－ネット	.63	.54	1.07	.99	1.19	.82	1.42	.78	.87	.67
ネット－現実	.60	.57	.79	.83	.51	.50	.39	.37	.49	.53

3.2.1. 相関関係

まず、被験者全体で、5因子のそれぞれにおける各自己間のギャップ得点と自尊感情得点との間のピアソンの相関係数を求めた（表3）。

その結果、外向性以外の4因子において、理想－現実ギャップ得点と自尊感情得点との間に有意な負の相関が見られた。つまり、理想の自己と現実の自己のギャップが大きいほど自尊感情が低いことが示唆された。この傾向は理想の自己と現実の自己のズレと自尊感情を扱った先行研究の結果と同様である（遠藤 1992；水間 1998；松岡 2006）。

また、理想－ネットギャップ得点では、情緒不安定性のみにおいて、自尊感情得点との有意な負の相関が見られた。これは、情緒不安定性において、理想の自己とネット上の自己のギャップが大きいほど自尊感情が低くなることを示唆する。

そして、ネット－現実ギャップ得点では、外向性と開放性において自尊感情得点との有意な正の相関が見られた。この2因子においては、現実の自己とネット上の自己のギャップが大きいほど自尊感情が高くなることが示唆された。

表3 因子ごとの理想－現実、理想－ネット、ネット－現実のギャップ得点と自尊感情得点との相関係数

	外向性			情緒不安定性		
	理想－現実	理想－ネット	ネット－現実	理想－現実	理想－ネット	ネット－現実
自尊感情得点との相関係数	-.140	.190*	.014	-.383**	.148	-.264**
	非勤働性			開放性		
	理想－現実	理想－ネット	ネット－現実	理想－現実	理想－ネット	ネット－現実
自尊感情得点との相関係数	-.189*	.143	-.149	-.326**	.233*	-.111
	非調和性					
	理想－現実	理想－ネット	ネット－現実			
自尊感情得点との相関係数	-.252**	.144	-.028			

*. 5%有意 ** .1% 有意

3.2.2. ギャップ得点の高い群と低い群の比較

続いて、5因子それぞれについて、理想－現実ギャップ得点、理想－ネットギャップ得点、ネット－現実ギャップ得点の高い群と低い群に調査対象を分け（メディアン分割による）、群間で自尊感情に差があるかについて t 検定を用いて分析した（表4）。

表4 因子ごとの理想－現実、理想－ネット、ネット－現実のギャップ得点群ごとの自尊感情得点とSD

ギャップ		外向性					
		理想－現実		理想－ネット		ネット－現実	
		高群	低群	高群	低群	高群	低群
自尊感情得点		26.73	28.62	28.09	27.60	28.61	27.16
SD		8.07	7.44	8.24	7.48	8.45	7.17
ギャップ		情緒不安定性					
		理想－現実		理想－ネット		ネット－現実	
自尊感情得点		26.21	29.03	26.31	29.27	29.13	26.35
SD		7.09	8.07	8.15	7.08	7.98	7.29
ギャップ		非勤働性					
		理想－現実		理想－ネット		ネット－現実	
自尊感情得点		27.05	28.53	27.57	28.00	29.31	26.50
SD		7.42	8.05	7.87	7.68	7.51	7.77
ギャップ		開放性					
		理想－現実		理想－ネット		ネット－現実	
自尊感情得点		26.25	28.96	27.47	28.12	29.58	26.32
SD		7.87	7.50	8.42	7.04	7.93	7.33
ギャップ		非調和性					
		理想－現実		理想－ネット		ネット－現実	
自尊感情得点		27.36	28.20	27.85	27.74	29.45	26.52
SD		7.25	8.24	8.61	7.07	7.66	7.63

その結果、まず、外向性において、理想－現実ギャップ得点が低い群のほうが高い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 3.67, p < .001$)。また、ネット－現実ギャップ得点が高い群のほうが低い群よりも自尊感情が高かった ($t(116) = 2.80, p < .001$)。

次に、情緒不安定性において、すべてのギャップ得点群間で自尊感情の有意差が見られた。情緒不安定性では、理想－現実ギャップ得点が低い群のほうが高い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 1.99, p < .05$)。また、理想－ネットギャップ得点が低い群のほうが高い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 2.11, p < .05$)。一方、ネット－現実ギャップについては、この得点が高い群のほうが低い群よりも自尊感情得点が高い傾向が見られた ($t(116) = 1.97, p < .10$)。

非勤働性においては、理想－現実ギャップ得点が低い群のほうが高い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 2.88, p < .001$)。また、ネット－現実ギャップ得点が高い群のほうが低い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 1.99, p < .05$)。

開放性においては、理想－現実ギャップ得点が低い群のほうが高い群よりも自尊感情得点が高い傾向が見られた ($t(116) = 1.90, p < .10$)。また、ネット－現実ギャッ

プ得点が高い群のほうが低い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 2.32, p < .05$)。

非調和性においては、ネット－現実ギャップ得点が高い群が低い群よりも自尊感情得点が高かった ($t(116) = 2.06, p < .05$)。

4. 考察

まず、3.1.の分散分析の結果からは、Big Five尺度の各因子に含まれる項目への得点において、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の間に差があることが示された。

因子ごとに見ると、情緒不安定性、非勤働性、非協調性においては、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の順で得点が高かった。つまり、これらの3因子においては、ネット上の自己の得点は、理想の自己と現実の自己の間に位置するといえる。また、この3側面は、得点が高いほどネガティブな傾向を示すといえる。したがって、この結果は、調査対象がネット上で、現実の自己とは異なる、より理想に近い自己を表出していることを示唆するといえる。この結果は、小杉（2018）の先行研究と同様であり、岡本（2013）や長谷川（2010）によるネット上での自己呈示およびその内在化の理論を支持する結果であるといえる。

また、小杉（2018）と同様、開放性においては、現実の自己とネット上の自己の間に差がみられず、理想の自己の得点がそれらより高いという結果となった。この結果は、ネット上においては、理想の自己ではなく現実の自己を反映させたような自己が表出されることを示した長谷川ら（2007）や Back et al.（2010）を支持するといえる。

開放性は、多才で想像力に富み、進歩的、独創的で頭の回転が速く、柔軟で独立的で、美的感覚が鋭い、などの傾向を一つにまとめた因子であるが（大沢 2002）、本研究の調査対象は、ネット上のコミュニケーションにおいて、このような側面については現実よりもよく見せたいとは考えなかったことが示唆される。これに関連して、外山・桜井（2001）は、日本人の大学生および専門学校生において、5因子モデルの調和性と誠実性に対応する側面については自分自身を他者に比べてポジティブにとらえる傾向（自己高揚的バイアス）がみられたのに対し、開放性に対応する側面においては自分自身を他者に比べてネガティブにとらえる傾向（自己卑下的バイアス）がみられたと報告している。

Markus and Kitayama（1991）の枠組みによれば、相互協調的自己観を有するといわれる我々日本人のポジティブな自己像は、西欧人の独自性を表出すること、自己主張することではなく、他者との調和を育むこと、協調を維持することなどによって得られるという。外山・桜井（2001）は、このことから、集団志向的で周囲の人々との調和や一致を重んじるといわれる日本人では、個人を他者から際立たせる特性の開放性では自己卑下的バイアスが、調和性や誠実性においては自己高揚的バイアスが見られたのではないかと考察している。つまり、開放性はそれをおもてに出すと集団からネガティブに評価される可能性があるため、その表出が控えめになると考えられるのである。

本研究の調査対象においてもこのような傾向があり、ネット上においてであっても、開放性の側面で現実よりも理想に近い自己を表出することには消極的になっている可能性がある。

外向性については、現実の自己と理想の自己の間に差が見られず、ネット上の自己の得点がこれらよりも有意に低いという結果となった。小杉(2018)では、外向性は理想の自己、ネット上の自己、現実の自己の順に得点が高いという結果となっており、大学生がこの側面について、ネット上で、現実の自己とは異なる、より理想に近い自己を表出していることが示唆されている。それに対し、本研究の調査対象は、この側面についてネット上ではより消極的な表出をすることが示唆された。この点については、本研究で用いたBig Five尺度短縮版の外向性に含まれる項目の内容が関係していると考えられる。外向性に含まれた項目は、「外向的、話好き、社交的、無口な(反転項目)、陽気な」の5項目であった。これらの側面の中には、ネット上の非対面のコミュニケーションでも表出が可能なものもあると考えられるものの、対面のコミュニケーションでなければ発揮できないものもある。したがって、後者の側面についてのネット上の自己の評価は低めにせざるをえなかったのではなかろうか。

一方、現実の自己と理想の自己の間に差が見られなかったことから、調査対象が、自らの外向性の側面について理想に近いものと評価していることが示唆される。外向性に含まれる社交的な側面は、他者との良好な対人関係を構築、維持していく上で大変重要である。本研究の調査対象は、この側面については普段から理想的に振舞おうと努力しているのかもしれない。ただし、データをより詳しく見てみると、外向性においては、現実の自己の得点よりも理想の自己の得点のほうが高い調査対象は61名とほぼ半数であった。つまり、理想とする外向性が現実の自己の外向性よりも低い調査対象が半数近く存在しているのである。理想とする外向性がどのようなものなのかについては、今後より詳細に検証する必要がある。

ここからは、Big Fiveの5因子における3つの自己間のギャップと自尊感情との関係について考察する。本研究では、理想-現実ギャップ得点、理想-ネットギャップ得点、ネット-現実ギャップ得点のそれぞれの高得点群と低得点群の間で自尊感情得点に差があるかについて分析をおこなった(3.2.2.)。このうち、理想-現実ギャップ得点については、先行研究から、得点の高い群よりも低い群のほうが自尊感情得点が高くなることが予想された(遠藤1992; 水間1998; 松岡2006)。そして、分析の結果、非調和性を除く4因子においてこの予想が支持された。ただし、非調和性においても、相関係数からは同様の傾向がみられることが確かめられている。これらの結果から、本研究においても、現実の自己が理想の自己の近くにいう認識が、自己に対する評価感情の高さと結びついていることが確かめられたといえる。

情緒不安定性においては、さらに、理想-ネットギャップ得点の低得点群のほうが高得点群よりも、ネット-現実ギャップ得点の高得点群のほうが低得点群よりも自尊感情得点が高かった。理想の自己とネット上の自己の差の大きさには、ネット上で行っている理想の自己に近づけるため

の自己呈示に対する自己評価が反映されていると考えられる。つまり、このような自己呈示がうまくいっているとみなしていれば差は小さくなると考えられる。また、現実の自己とネット上の自己の差については、それが大きいほど理想に近づけるための自己呈示がうまくいっているとみなしていると考えられる。したがって、情緒不安定性でみられた結果は、この側面を低く見せるための自己呈示がうまくいっていると自己評価した調査対象において、自尊感情が高かったことを意味する。

非勤勉性、非調和性では、ネット-現実ギャップ得点の高得点群のほうが低得点群よりも自尊感情得点が高かった。情緒不安定性と同様、これらの2側面についても、ネット上でより理想に近い自己、つまりよりポジティブな自己呈示をおこなっている調査対象において自尊感情が高かったことが示唆されたといえる。

これらの結果は、自らをよりポジティブに呈示する自己高揚的呈示と自尊感情の間に正の相関がみられることを示した谷口・清水(2017)の先行研究を支持する結果である。本研究の調査対象において、ネット上のコミュニケーションで現実の自己と理想の自己のギャップを埋めるような自己高揚的呈示が行われている可能性、およびそれが自尊感情を高揚させる機能をもつ可能性が示唆されたと考えられる。

開放性でも、ネット-現実ギャップ得点の高得点群のほうが低得点群よりも自尊感情得点が高いという結果となった。開放性はポジティブな側面であるため、調査対象がネット上で自己高揚的呈示を行うならば、ネット上の自己の開放性得点が現実の自己のそれよりも高くなると考えられる。しかしながら、開放性については、このような調査対象は41名であり、現実の自己の開放性得点のほうが高い調査対象が多数であった(77名)。このことから、ネット上で開放性を抑えるような自己卑下的呈示を行う調査対象のほうが、よりポジティブに開放性の呈示を行う者よりも自尊感情が高かった可能性がある。上述のように、開放性はそれをおもてに出すと集団からネガティブに評価される可能性があり、その表出が控えめになると考えられる側面である。したがって、開放性の自己卑下的呈示は、自尊感情を維持・高揚させるための戦略的な自己表出であると考えられる。

外向性においても、ネット-現実ギャップ得点の高得点群のほうが低得点群よりも自尊感情が高いという結果となった。また、ネット上の自己の外向性得点のほうが現実の自己のそれよりも得点が高い調査対象は29名であった。このような傾向は、開放性と同様であるが、上述のように本研究の外向性に含まれる項目には、ネット上の非対面のコミュニケーションでは発揮しにくいものが含まれていたことに注意しなければならない。つまり、ネット上の自己の外向性得点が低くなる要因には、ネット上でこの側面を表出することの難しさと、調査対象による戦略的な自己卑下的呈示の両方が存在する可能性があると考えられるのである。開放性および外向性についてのネット上の自己呈示に関しては、更なる検証の必要がある。

以上のように、本研究では、Big Five尺度短縮版への回答をもとに、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の差、および理想-現実、理想-ネット、ネット-現実の

ギャップと自尊感情との関係について検討した。質問紙調査の結果、まず、本研究の調査対象において、情緒不安定性、非勤勉性、非調和性の3側面についてはネット上で現実の自己よりも理想の自己に近い自己を表出する自己高揚的呈示をすること、外向性においては、ネット上で理想から離れた自己卑下の呈示をすること、開放性においてはいずれの自己呈示も見られないことが示された。また、自尊感情については、全体として理想－現実のギャップが大きいほど自尊感情が低かった。一方、ネット－現実のギャップについてもその大きさが自尊感情に影響を与える可能性が示唆された。とくに、情緒不安定性、非勤勉性、非調和性といったネガティブな側面については、ネット上で自己高揚的呈示をする者において自尊感情が高いことが示された。この結果は、ネット上のコミュニケーションにおける自己呈示に、理想－現実のギャップを埋め、自尊感情を高揚させる機能がある可能性を示唆するものであると考えた。また、ポジティブな側面である外向性および開放性においても、ネット－現実のギャップが大きい者において自尊感情が高いという結果となったが、この2側面については、ネット上における自己卑下の呈示が意味することについて、更なる検討が必要であると考えられる。

本研究では、現実の自己、ネット上の自己、理想の自己の各得点間の差の絶対値をギャップ得点としたが、当然ながらこの方法では、得点間の差の符号（プラスかマイナスか）を問題にすることができず、そのことにより、調査対象の自己呈示の解釈が難しくなるケースがあった。また、同じ項目でも、調査対象によってポジティブな特性なのかネガティブな特性なのかの判断が異なる可能性があるが、本研究ではその点は問題しなかった。これらの点については今後詳しく検討する必要がある。

さらに、本研究の調査対象は、筆者の所属する大学で特定の講義を受講する学生のみであり、その多くが女性であった。したがって、本研究で得られた知見は、一般的なものではなく、本研究の調査対象に限定されたものである可能性は否定できない。調査対象の属性をより幅広くとらえた調査を行うことも今後の課題である。

引用文献

安藤 清志(1994). 見せる自分／見せない自分－自己呈示の社会心理学－サイエンス社

Back, M. D., Stopfer, J. M., Vazire, S., Gaddis, S., Schmukle, S. C., Egloff, B., & Gosling, S. D. (2010). Facebook profiles reflect actual personality, not self-idealization *Psychological Science*, 21, 372-374.

遠藤 由美(1992). 自己認知と自己評価の関係－重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討－ *教育心理学研究*, 40, 157-163.

深田 博己(1998). インターパーソナルコミュニケーション：対人コミュニケーションの心理学 北大路書房

長谷川 孝治(2010). 自己の表現 北村 英哉・浦 光博(編著) 展望 現代の社会心理学1 個人の中の社会(pp. 272-293) 誠信書房

長谷川 孝治・宮田 加久子・浦 光博(2007). インターネット上の自己評価と現実の自己評価との相互影響過程についての検討：両者のズレと精神的健康との関連の観点から *社会心理学研究*, 23, 45-56.

星野 命(1970). 感情の心理と教育(二) 児童心理, 8, 161-193.

梶田 叡一(1988). 自己意識の心理学 東京大学出版会

小杉 大輔(2018). 大学生におけるインターネット上の自己のパーソナリティ特性の認識：現実の自己および理想の自己との比較 *日本教育工学会論文誌*, 41(Suppl.), 129-132.

久保 真人(1998). 自己評価と自己呈示スタイルとの関係 *社会心理学研究*, 14, 78-85.

Markus, H., & Kitayama, S.(1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation *Psychological Review*, 98, 224-253.

松岡 弥玲(2006). 理想自己の生涯発達－変化の意味と調節過程を捉える－ *教育心理学研究*, 54, 45-54.

水間 玲子(1998). 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について *教育心理学研究*, 46, 131-141.

並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之(2012). Big Five尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 *心理学研究*, 83, 91-99

沼崎 誠(2001). 自己高揚 山本 真理子・外山 みどり・池上 知子・遠藤 由美・北村 英哉・宮本 聡介(編) 社会的認知ハンドブック(pp.45-47) 北大路書房

沼崎 誠・工藤 恵理子(2003). 自己高揚的呈示と自己卑下の呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果－実験室実験とシナリオ実験との相違－ *実験社会心理学研究*, 43, 36-51.

岡本 真一郎(2013). 言語の社会心理学 中公新書

大沢 正子(2002). 5因子論とBig Five尺度の検討：Y-G, MPIとのジョイント因子分析を通して *教育諸学研究*, 16, 7-20.

杉谷 陽子(2009). インターネットにおける自己呈示・自己開示 三浦 麻子・森尾 博昭・川浦 康至(編著) インターネット心理学のフロンティア(pp.59-85) 誠信書房

谷口 淳一・清水 裕士(2017). 大学新入生の自己高揚的呈示が友人関係の形成と自尊心に及ぼす影響－APIMを用いたペア縦断データの分析－ *実験社会心理学研究*, 56, 175-186.

外山 美樹・桜井 茂男(2001). 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 *心理学研究*, 72, 329-335.